



リケジョイベントを通して

産業技術総合研究所 中島裕美子

平成 28 年 8 月 28 日、女性の職業生活における活躍の推進に関する法律、女性活躍推進法が成立した。この法律は、働く場面で活躍したいという希望を持つすべての女性が十分能力を発揮できる社会を実現するために制定されたもので、女性採用比率の数値目標などが盛り込まれている。このような流れの中、一介の研究者である私も、最近一端の女性研究者としていくつかのリケジョイベントに出席する機会を得た。本協議会 (CanApple) が目指す「人工光合成の実現」とは程遠い話題となってしまうが、さきの目標に加えて掲げられる「社会全体での健全なサイエンスコミュニケーションの構築」に無理やり関連付けて、リケジョイベント参加にまつわる筆者の個人的な見解を、徒然なるままに本稿に紹介する。

リケジョイベントでまず圧倒されるのは、女性研究者達のパワーである。皆さん将来ビジョンを明確に持っており、さぞかし日々の仕事も精力的に進めておられるのだろうと容易に想像できる力強さに溢れている。同時に、女性としてのしなやかさも持ち合わせている点も共通しており、とても魅力にあふれている方が多い。女性であるからと言って無理に片意地を張ることなく、自分らしいやり方を見出すことで、高い仕事のパフォーマンスを挙げてこられたのだろうと思う。このような姿を見ると、自分の役割を的確に認識し、組織の一員としてより喜ばれる存在となることで、自身の活躍する場がさらに広がるという、社会人として重要なことを再確認させられる。

さて、このようなイベントでは結婚・出産や、家事と仕事の両立に大きな焦点が当てられることが多い。単身の時からリケジョイベントに出席する機会があった筆者は、回答できる質問も限られることから、いささか居づらい思いをしたものである。一方で、現在では結婚・出産の遅かった筆者を

例に挙げ、「案ずるなかれ、若いときにやりたい仕事に没頭して悔いはなし」と大手を振るって力説しているが、同時に、「お前みたいになりたくないから、普通の女子は悩んでいるんだろ」と意見をする筆者の旦那の顔がちらっと脳裏に浮かび、これもまた煮え切らない思いでもある。結局、答えなどなく、それぞれが自分で選択した道を納得して突き進むしかないのだという、ひどく一般的な結論に行きつく。

あるイベントで、女子学生から、「化学と研究、大好きなんです！」と指摘されたことがある。自分では公言したことはないし、そこまではないと思っていただけに、青天の霹靂であった。ただ、進むべき道の選択の自由が存在し、さらにその先に活躍の場を提供してくれている日本の化学界には、感謝してもしきれない。この感情が「好き」というものなのかもしれないと、淡い恋心に気づかされた一言であった。

「女性研究者が少ないから、いろいろな仕事回过头きて大変だね」、とお声がけいただくことがある。しかし、ここに一部をご紹介した通り、リケジョイベントを通じて学べることも多く、個人的には楽しんでいられる部分も少なくない。したがって、女性活躍推進法には感謝する次第である。ただ、本法律が掲げる、研究者の採用に占める女性の割合の目標値 (30%) は、理工系学生の女性比率 (約 20%) を鑑みると、いささか無理な値なのではないかと、最後に不必要なコメントを付け加えて、本稿を締めくくりにする。



息子と一緒に参加した研究室旅行にて